



伊雑宮

御祭神 伊雑宮 天照坐皇大神御魂

皇大神宮の別宮として、天地の内に隈無く光が照り徹ると讃えられる大御神の御魂をお祭りしています。

二鎮座の由緒と歴史

当宮の創立は、約二千年前、第十一代垂仁天皇の御代といわれます。「倭姫命世記」は、皇大神宮ご鎮座の後に御贄地を定めるため倭姫命が志摩国を巡行された後、伊佐波登美命が豊かな稲を奉り、この地に神殿を造営したと伝えまます。また、延暦二十三年(八〇四)年朝廷に提出さ

れた「皇太神宮儀式帳」にも宮名が見えることから、少なくともそれ以前から神宮の別宮として位置付けられていたと考えられます。志摩地方は奈良時代以前から海洋部族である磯部氏の根拠地であり、彼らがお祭りしていた神の社と、当宮との関係については様々な説が挙がっていますが、いつから朝廷が関わるものになったかなどは未だ明確ではありません。鎌倉時代に編集された「吾妻鏡」には、源頼朝が神宮に祈願した際、神馬を伊雑宮に贈ったと記されています。この頃、神領を守るため、伊雑御浦惣校(伊雑御浦)が置かれたましたが、室町時代以降は力が衰え、江戸時代初頭、二度の仮殿遷宮は、磯部の郷人の手によって行われました。

中世になると伊雑宮にも御師が現れ、明応から慶長(四九二〜一六一五)の頃には檀那(特定の寄進者)を持つに至りました。やがて、伊雑宮の神格を高めようと、磯部の御師の間に、内外両宮は伊雑宮の分家であるという主張が生まれます。「日本書紀」にある「磯宮」、「倭姫命世記」の「伊雑宮」などが伊雑宮であるとの説を立て、神訴に及ぶことが重なりましたが、明暦四年(一六五八)朝廷からの諭旨・裁決によって伊雑宮は内宮の別宮と定められました。地元の人々との長く深い関わりにより、伊雑宮には高欄を巡らし金銅飾金物を奉飾するなど他の別宮とは異なる点がありましたが、明治四十二年(一九〇九)度の遷宮から他の別宮と同じ建築様式に改められました。

特殊祭典

御田植式 伊雑宮の御田植式は極めて古雅な神事で、「磯部の御神田」の名で国の重要無形民俗文化財に指定され、日本三大田植祭の一つとされます。毎年、宮域の南に隣接する御料田で六月二十四日(六月月次祭当日)に、花菅笠を被った早乙女や、赤い振り袖の少女の姿で田船に乗る太鼓打ちの少年、素襖烏帽子の囃子方など、色鮮やかな装束を



大うちわ(通称ゴンパウチワ)は長さ11m。その竹を持ち帰って神棚等に祭り、大漁満足、海上安全のお守りにする信仰がある。

着けた地元の人々によって、華やかに行われます。参拝・修祓の後、まず早乙女等が御料田に下り、手を取り合って回る「苗取り」が行われます。次いで、御料田の畦に立てられた大うちわを三度扇いで倒し、近郷漁村の青年たちが下帯姿で勇壮に竹を奪い合う「竹取り」が行われます。続いて御田植となり、一列に並んで植えてゆく間、謡方、小鼓方、笛方、ささら方、太鼓方



太鼓打ちやささら方の少年たち。

が調子をそろえて囃します。半分を植え終わった頃休憩し、少年二人による「刺鳥差」の舞踊や、乾若布を肴に小宴を行い、植え終ると一同の「踊り込み」で再び伊雑宮に戻り、童男の「納めの仕舞」で幕を下ろします。式は、午前十時から夕刻まで、一日を掛けて行われます。

調献式 十月二十五日(神嘗祭当日)に、海の幸・山の幸を神前にお供えし、神恩に感謝を捧げるお祭りで、志摩地方一円の秋祭りとなっています。

御祭 旧暦六月二十五日に行われる、崇敬者の夏祭りです。

恒例のお祭り

『延喜大神宮式』に、この四所別宮に対して幣帛を「祈年、月次、神嘗の御祭に供えよ」とあるのをそのはじめとして、今も祈年祭、月次祭、神嘗祭、新嘗祭には皇室から幣帛が奉られます。

1月1日	歳旦祭
1月3日	元始祭
2月11日	建国記念祭
2月20日	祈年祭
2月23日	天長祭
5月14日	風日祈祭
6月24日	月次祭
8月4日	風日祈祭
10月24日	神嘗祭
11月26日	新嘗祭
12月24日	月次祭
25日	奉幣
午後10時	由貴夕大御饌
午前2時	由貴朝大御饌
午前10時	奉幣
午前8時	大御饌
午前10時	奉幣
午後10時	由貴夕大御饌
午前2時	由貴朝大御饌
午前10時	奉幣

式年遷宮

神宮では二十年に二度、殿舎や御装束神宝を新たにしてお祭りです。『太神宮諸雜事記』によると、天平十九年



伊雑宮遷宮祭 奉幣(平成26年)

(七四七)に第四回遷宮が斎行され、同年十二月に「諸別宮遷し奉りて二十年に二度の御遷宮、長例の官旨了んぬ」との記載があるように、奈良時代には現在と同じように、別宮も式年遷宮が行われていました。第六十二回神宮式年遷宮は平成二十五年秋、両正宮とそれぞれの第一別宮で行われ、伊雑宮でも、平成二十六年秋に式年遷宮が行われました。現在の殿舎は西側の御敷地にあり、東側は古殿地となっています。



佐美長神社 さみながじんじや



佐美長御前神社 さみながみまえじんじや

伊雑宮所管社
伊雑宮より約800メートル南にご鎮座する佐美長神社は、大蔵社または穂落社とも称され、大蔵神(五穀の神)をお祭りしています。倭姫命がご巡行を経て、鳥の鳴く声が止まないの従者に見に行かせると、葦原の中に根本は一本で穂が幾重にも分かれて成る稲があり、一羽の真名鶴がその穂をくわえて飛びながら鳴いていました。この鶴を大蔵神と崇めて、この地にお祭りしたとの伝えが残ります。今も地主の神として崇められ、地鎮等の信仰があります。同社の御前には、佐美長御前神をお祭りする佐美長御前神社の小祠四社が並んでいます。